

三清書屋

硯
·
墨

三清書屋

碑
·
墨

中華書局

圖書在版編目 (CIP) 數據

三清書屋硯·墨 / (日) 公森仁著; 杜曉帆譯. — 北京:
中華書局, 2008.12

ISBN 978-7-101-06399-8

I. 三... II. ①公... ②杜... III. ①古硯—收藏—中國—
圖錄②墨—收藏—中國—古代—圖錄 IV. G894-64

中國版本圖書館 CIP 數據核字 (2008) 第 182438 號

-
- | | |
|------|--|
| 書名 | 三清書屋·硯墨 |
| 編著者 | 公森仁 |
| 譯者 | 杜曉帆 |
| 責任編輯 | 朱振華 |
| 出版發行 | 中華書局
(北京市丰台区太平橋西里 38 號 100073)
http://www.zhbc.com.cn
E-mail: zhbc@zhbc.com.cn |
| 印刷 | 北京雅昌彩色印刷有限公司 |
| 版次 | 2009 年 1 月北京第 1 版
2009 年 1 月北京第 1 次印刷 |
| 規格 | 開本 787 × 1092 毫米 1/16
印張 14.25 |
| 國際書號 | ISBN 978-7-101-06399-8 |
| 定價 | 380.00 圓 |
-

序

在甘肅省博物館，現存有武威出土的刻有『白馬作』、『史虎作』的漢代毛筆。之後，雖然在歷代文獻中出現過許多筆匠的名字，但令人遺憾的是既找不到他們的履歷，且流傳下來的筆也非常少。這是二零零五年六月《三清書屋·筆》出版時我深切感受到的。

說到墨，在日本正倉院所藏唐代的墨上可以看到墨匠的名字。從南唐時代依舊活躍的墨務官李廷珪以後，還可以了解很多墨匠。到明朝的羅小華時代，能够制造與黃金同等價值的墨的匠人登場後，有關他們生活的記載就漸漸地多了起來。

為什麼要在研磨之後便會消失的墨上花費那么多心血呢？的確，有些御墨圖案相同但大小有異，看來賜墨也是拿來使用的了。另外，同樣的圖案又會有不同的作者，不知是否是爲了提高技藝而相互切磋琢磨。

想想那時的墨匠，墨變成黃金也沒有什麼不可思議的，可以說不是人在磨墨而是墨在磨人啊！

再看硯，從唐代開始出現了歙州硯、端溪硯，但不見硯匠之名。南唐時期，李少微以硯務官的身份見於史籍，但之後再沒有聽到過什麼有名的硯匠。就我所知也就是清代的顧二娘了。

據說澄泥硯、陶硯上有刻硯匠的名字。為何石硯上儘管刻有各種各樣的贊詞，但不能留下硯匠的名字呢？

與筆、墨、紙不同，硯的材料的确比較難得。山坑中的硯材利用民間的財力即有可能得到；而水坑中的硯材若沒有國家財力支持是辦不到的，而且也只有在一個國富民強的安定時代才能得到。

挖掘水坑中的硯材時，在地下向深處挖掘的同時，還要不斷地將積水排出，數千的民工可能要花費數月的時間，才能沿着礦脈找到所需的硯材。這也只是在干旱的年頭才可以實施的大項目，如同尋找金、銀、鑽石一樣。

在用國家的財力物力選出的硯石上刻上民間硯匠的名字，似乎於理不容。再者，硯是一石一面貌，在這個世界上沒有完全一樣的兩方硯。原石由水中搬運上來，根據石材的特徵再制作成硯，那是硯匠的意義所在，也可以說具有了國家的象徵。想一想即使是乾隆皇帝，爲了得到其故鄉的松花江綠石而做出了多大的努力，就可以理解爲什麼官民硯匠的名字未能流傳了。

一九八二年夏天我首次訪問中國。之後我一直致力於筆、墨、紙、硯以及與書法相關的文房用品的收集。對於這一切，我首先要感謝十三年前過世的父親，以及能夠對我花費大半的工資而不流露絲毫不滿的妻子。

我不是學者，也不是商人，只是一介書法的愛好者，對於墨、硯的歷史變遷以及發展並不是那麼關心。我熱愛中國，近五十次的訪問過程中與這些物品相遇，能够留下一本書還是非常愉快的。

一九八五年前後，北京和上海都有只出售硯的專門店鋪，都是從民間收購硯，而後主要出售給日本人。在安徽省合肥也有同樣的店，我記得曾經在那裏買過硯。可是，那家店也就是三年左右就沒有了踪影。有一次，我在那家店看了五百多方硯。許多硯上還沾着墨和泥，洗淨之後我把先選入眼的放在一邊，而後再花很多時間在已經選出的硯中決定買哪些。最後我的手弄得很黑，腿和腰搞得很痛，在那種心情愉悅的疲勞感中鑒別硯臺，我甚至忘記了吃飯。這樣的體驗，對提高自己的眼力是很有裨益的。

上述活動往往沒有什麼事先的策劃，我都是收集到了硯的信息後，便匆匆前往購買。很多中意的硯由於禁止出境而不能購買，至今我仍是心存遺憾。之後，我還先後去了天津、大連、沈陽、長春、哈爾濱、鄭州、洛陽、西安、寶雞、天水、蘭州、酒泉、敦煌、蘇州、無錫、揚州、南京、杭州、寧波、紹興等地，有了很多的體驗，可是再也沒有遇到過五百方硯臺的機會了。

不知為什麼一直沒有運氣遇到好的墨。購入的墨大半是在北京和上海買的，看來好墨只會匯集到大城市，在地方買到的多數是民國時期的。

『錢是沒有白來的！』這是我母親的口頭禪。雖然不免會有價格高質地差的墨，但是好墨的價格總是很高的。可是，我的工資不高，又想買到價格低質量好的墨，所以總是反復失敗。因此我總是拜托有眼力的人幫我購墨。我在買墨時總會說一句關鍵話：『我不是商人，只是一個愛好者。我不會賣給別人，因此請便宜一些。』這不是假話而是發自內心的。不斷重複着這句話，再經過二十五年的相處，對方好像理解了我的心情，就會與我交易，慢慢地我竟然也收集到了一些自己想要的墨。

可是，自從拍賣盛行以來情況就不好了。不但東西少了，而且價格也不是我能接受的了，所以我現在已經不再購買墨和硯了。

對我來說，二十五年來與硯、墨的相遇之外，與那么多的中國人成為朋友是拿什麼都不可能替代的財富。有時候想，與其出版《硯·墨》一書，還不如出一本友人們的寫真集呢。

與上一次一樣，此次出版《三清書屋 硯·墨》也給許多朋友增添了麻煩，我內心十分不安，同時也萬分地感謝。翻譯方面，聯合國教科文組織北京辦事處的杜曉帆先生；鑒定硯、墨的真偽方面，甘肅省博物館的李天銘先生、甘肅省考古所的王輝先生；編輯方面，中華書局的朱振華先生；校正方面，北京的友人劉玫女士等均給與諸多幫助。另外，此次又拜托北京雅昌彩色印刷有限公司技術顧問辻隆生先生在書籍的版面設計、裝訂給與幫助，我的同鄉渡邊宗一先生、知彥先生兄弟拍攝了照片。在此再一次表示感謝。

我總在想，還會有這樣的機會嗎？

二零零八年四月

公森 仁

序文

甘肅省博物館に武威の遺跡から出土した漢時代の筆に「白馬作」「史虎作」と刻された筆が現存している。その後文献上では多くの筆匠名が脈々と輩出しているにも関わらず、その人達の略歴もなく、筆そのものも非常に少ないことに驚いた。二〇〇五年六月に「三清書屋 筆」を出版した時に感じたことである。

墨に関しては日本の正倉院に残る唐時代の墨より墨匠名の記録が見られる。その後、南唐時代に至り墨務官として活躍をした李廷珪以後、多くの墨匠を知ることができる。明時代の羅小華に至っては黄金と同等の価値をもつ墨が出来るようになり墨匠が脚光を浴び、その人々の生き様などを知り得る記録が残るまでになる。

磨れば消えてゆく墨に、何故にあれだけの心血を注いでゆくのだろうか。確かに御墨には同じ図柄で大きさを異にするものがある。おそらく賜墨としても使用されたものだろう。また、図柄は同じで作者を異にするものもある。お互いに技術向上を目指して切磋琢磨していたのであろう。

その時々々の墨匠の思いを考えれば、墨が黄金に化けても不思議ではないし「人が墨を磨るのではなく、墨が人を磨る」の言に納得である。

また硯に関しては唐時代より歙州石、端溪石の出現をみるが硯匠の名が見当たらない。南唐時代に李少微が硯務官として登場するがその後、硯匠として名を馳せた人物は聞かない。私が知り得るのは清時代の顧二娘ぐらいである。

澄泥硯、陶硯には硯匠の名が刻されたものがあると聞くが、何故、石硯には様々な讃が刻されているにもかかわらず、硯匠名は残っていないのだろうか。

筆、墨、紙と違って硯となればその材を入手する事は確かに困難となる。山坑の硯材なら民の財力でも可能だと思うが、水坑の硯材となれば国家事業でなければ不可能である。それも国力が富み、国政が安定している時代でなければ出来ないだろう。

地下深く掘り進み、湧き出てくる水をくみ上げ、数千人の民が数カ月を要して硯材の鉱脈に沿って硯石を見つけるのである。それも水量の少ない旱乾の年のみに実行するしかない大事業であり、将に金、銀、ダイヤモンドを探し当てるようなものである。

国家の威信をかけて選り出した硯石に、民の硯匠の名を刻するなど許される理もなかったであろう。それも硯は「一石一面貌」である。同じ硯は二つとこの世に存在しない。原石を水中より運び上げ、その石の持つ特徴を生かし作硯をする。そこに硯匠の意味するところがあり、国の象徴があつたに違いない。乾隆帝でさえ出身地の松花江緑石を得るため、いかなる努力をした事かを思えば硯匠の名が官民を問わず残らなかったのも理解できそうである。

私が中国を訪れたのは一九八二年の夏が最初である。筆、墨、硯、紙をはじめ書に関する文房具に魅せられ集め続けてこられたのは、十三年前に他界した父の影響と、私の給料の大半を費やしても何も不平を漏らさなかった妻のお陰であると感じている。

私は学者でも、商人でもない。一介の書家であり愛好家である。墨、硯の歴史的発達や変遷には関心が薄い。中国を愛し、五十回近く訪れる中でこれらの品々と出会った証しとして、一冊の本に残せるのは嬉しい限りである。

一九八五年前後、北京と上海に硯のみを専門に販売する会社が有った。民間より買い上げて主に日本人に売っていた会社である。安徽省の合肥にもあった。そこで硯を買ったのを覚えていた。しかしその会社も三年程で姿を消してしまった。その会社に行くとい度五百面以上の硯を見る事が出来た。それも墨や泥が付いて居り、それらを水で洗って良さそうな硯を仮に選んでおき、そして選んだ硯の中より時間をかけ買うかどうかを決定するのである。手が真っ黒になり、足や腰が痛くなる。そんな心地よい疲労感の中で、食事をも忘れて硯を鑑別する。この体験で少しは眼が養われたような気がする。

このような企画がどのような経緯で作られたかは知る由もないが、硯が集まれば連絡が入り急いで買いに走ったものだ。欲しかった硯が、持ち出し禁止になり購入出来なかった品も多くあったのは今でも心残りである。その後は天津、大連、瀋陽、長春、ハルビン、鄭州、洛陽、

西安、宝鷄、天水、蘭州、酒泉、敦煌、蘇州、無錫、揚州、南京、杭州、紹興、寧波等にも出向いた。色々な経験をさせてもらった。しかし一度に五百面もの硯を見る機会はその後再び訪れなかった。

墨に関しては中々良いものと出会う機会に恵まれなかった。墨は北京、上海で購入したものが大半である。やはり良い墨は大都会に集まって来る。地方で買ったものはほとんど民国時代のものが多かった。

「お金はタダ取らん！」というのが母の口癖である。値段が高くとも悪い墨は多くあるが、やはり良い墨は値段が高い。しかし私は安月給。安くて良い墨が欲しい。そこで失敗を繰り返す。だから私は眼力のある人から墨を買うことにしている。私には唯一のセールスポイントの言葉がある。「私にはお金がありません。私は商売人ではありません、愛好家です。他人に売ったりはしません。安くしてください。」嘘ではなく真実の言葉である。そんな言葉の繰り返しで付き合いが二十五年も続けば相手もこちらの心情を察して売買が成立し、徐々に思うような墨が集まってきた。

しかし拍賣會が流行してからは駄目。品物も少なくなり、私が思っている値段とは遠くなる一方で、今では買うことはもう諦めた。

この二十五年間で硯、墨と出逢ったこととは別に、色々な中国人と友人になれた事が今とな

れば何にも増して私の掛け替えのない財産である。思えば「硯・墨」の本の出版より友人知人達の写真集を出した方が良かったかもしれない。

今回の「三清書屋 硯・墨」の出版にあたって前回同様多くの友人に多大な迷惑を掛けてしまいました。心より申し訳なく、同時に感謝して居ります。翻訳の件では公私にわたりユネスコ北京事務所の杜曉帆さんに、硯、墨の新旧の鑑定には元甘肅省博物館の李天銘さん、王輝さんに、また編集では中華書局の朱振華さんに、校正では北京の友人である劉玫さんに大変お世話頂きました。また、本のレイアウト、装丁には北京雅昌彩色印刷有限公司の技術顧問である辻隆生さんに、写真は私の同郷の渡辺宗一さん、知彦さん兄弟に今回もお願いしました。有り難うございました。

再び、この様な機会があるのだろうかと思いつつ。

二〇〇八年四月

公森 仁

目錄

1	圓形石硯	25	箕形陶硯	57	蟬形歙硯
2	長方石硯	27	箕形陶硯	59	嫩鷄肝端板硯
3	鼓形三足陶暖硯	29	箕形陶硯	61	長方水波紋歙硯
5	青瓷三足硯	31	馬蹄形陶硯	63	長方金雲歙硯
7	方形四足陶硯	33	風字形陶硯	65	麒麟抄手端硯
9	風字形陶硯	35	蓬萊端硯	67	馬肝色端板硯
11	舍利函石硯	39	蘭亭端硯	69	鱔魚黃澄泥硯
15	寶蓮頭陶硯	43	鱔魚黃澄泥石鼓硯	71	蝦頭紅澄泥硯
17	狻猊石硯	47	蘭亭端硯	73	長方砂斑端硯
19	風字形石硯	49	長方抄手端硯	75	仿唐八棱青玉硯
21	箕形陶硯	51	蓬萊端硯	77	長方雲福端硯
23	三彩八足圓形陶硯	55	長方歙硯	81	橢圓形端硯

83	瓜瓞橢圓形端硯	107	橢圓形端硯
85	五福天來端硯	109	磁州窯鼓形硯
87	荷葉橢圓形端硯	111	青花瓷暖硯
89	蕉葉端硯	113	山水圓形木硯
91	木葉形端硯		
93	姊妹端硯		
95	細羅紋歛板硯		
97	殘荷葉端硯		
99	牧牛隨行端硯		
101	五福天來端板硯		
103	橢圓形端硯		
105	門字形端硯		

墨

目錄

115	邵瓊林楊梅墨	139	淳化軒摹古寶墨	163	紫閣銘勲墨
117	程君房赤水珠龍紋墨	141	梅花形朱墨	165	仿宋玉兔朝元硯朱墨
119	程君房石榴墨	143	牛舌形朱墨	167	仿宋玉兔朝元硯墨
121	程君房玉蘭墨	145	仙山樓閣墨	169	劉塘湖心亭景墨
123	方林宗鳩硯式墨	147	春華秋實墨	171	汪進聖御賜朱墨
125	方景耀觸邪朱墨	149	春華秋實墨	173	曹素功萬壽無疆墨
127	程公瑜結綺墨	151	光分太乙墨	175	五百斤油墨
129	曹素功青麟髓墨	153	七香圖墨	177	汪近聖南宮池水墨（八錠）
131	曹素功青麟髓墨	155	山水清音墨	179	汪節庵培桂軒墨寶（八錠）
133	程公望卧獸墨	157	墨床墨	181	方振魯竹節墨
135	程正路章畫志墨	159	凌雲向日墨	183	龍香墨
137	淳化軒墨	161	映日凌雲墨	185	漢半瓦墨

- | | | | |
|-----|----------------|-----|----------------|
| 187 | 胡開文獅子鈕印墨（三錠） | 204 | 胡開文近思書屋墨 |
| 189 | 胡開文御園圖集錦墨（二錠） | 205 | 知味齋琴形墨 |
| 191 | 胡開文御園圖集錦墨（三錠） | 206 | 胡開文燾山彭氏珍藏墨 |
| 193 | 胡開文御題錦花圖詩墨（八錠） | 207 | 曹素功飛布山樵端友氏家藏之墨 |
| 195 | 胡開文黃山松煙墨 | 208 | 曹素功飛布山樵益友氏家藏之墨 |
| 196 | 胡開文黃山松煙墨 | 209 | 胡開文湘陰左氏珍藏墨 |
| 197 | 曹素功九子墨 | 211 | 佛像墨 |
| 199 | 九子墨 | | |
| 200 | 胡開文龍賓墨 | | |
| 201 | 胡開文本樨香館珍藏墨 | | |
| 202 | 胡開文松煙墨 | | |
| 203 | 胡開文封爵銘墨 | | |

